
異世界召喚の一例

Mr.あいう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界召喚の一例

【Nコード】

N1648L

【作者名】

Mr.あいう

【あらすじ】

俺はトラックに轢かれて神に出会ってそれから異世界に飛ばされた。
というただそれだけの話。

携帯の画面に映し出されているのは『なるう』と呼ばれる素人小説投稿サイト。

その中では普通の高校生と言いながら何故か赤い髪と左右違った色をした目を持っていて、しかもやたらアニメに詳しいどう見ても普通ではない高校生が神に異世界に飛ばされ、しかも何故か自分のもといった世界に帰ろうとせず、魔法と超能力と武術と話術とその他さまざまな能力を使ってどうやらかなり上級のモンスターを欠伸をかみ殺しながら片手で屠っていた。

どこかで見た事がある必殺技を使いその上級モンスターを粉碎して、なんか三人目のヒロインといい感じになったところで俺は携帯から目を上げた。

いつの間にか赤だった信号は青に変わって点滅していやがった。

一体、どれくらいの時間俺はその小説を読んでいたのだろうか。

ともかく、そんな事を考えているよりも早く家に帰るほうがよっぽど建設的な時間の使い方だと理解して、俺は急ぎ足でその横断歩道をわたろうと思ったその矢先。

目の端に、奇妙な違和感を感じて振り向くと……………

案の定、殺人的な質量を持って三トントラックが鼻の先にまで迫ってきていた。

「チッ……………」

叫び声を上げることすら叶わず、この世の理不尽に対する溢れかえる恨みを舌打ちでしか表現できずに、俺はそのままトラックに轢かれることとなった。

最期に頭をよぎったのが走馬灯ではなくさっき読んでいた異世界召喚のお約束『トラックに轢かれたと思ったら神に異世界に飛ばされ

た』という一文だった俺は、たぶん社会人失格だろう。

世界はどうやら俺が思っている以上に適当だった。

俺には確かにトラックに轢かれた気億が存在しており、俺は確かに死んでいるはず。

が、人間の想像力とはここまで現実を忠実に再現しているのかと心から賞賛したい。

俺は何処までも白い空間の中で、神様の如く存在と膝をつきあわせていた。

議題はもちろん……………

「ごめん。君わたしの手違いで死んじやった」

俺の頭の中の最も常識的部分が警鐘を鳴らす。

デジャヴかと思いきやさつき読んでた小説の一場面と酷似しているだけだった。

何かとても不愉快な状況に身を置いてしまっている事しか理解出来ない。

「だから……………異世界に飛んでもらいます」

「死んでしまえ」

月並みすぎて涙が出そうになった。欠伸で。

とりあえず目の前の存在に自殺を推奨してみる事にする。

「うーん、まだ混乱してるのかな？」

無視された。

「大丈夫だって。なんか森羅万象を操る的な能力授けるから」

そんな事を少女の外見で言うそいつは俺の大嫌いな顔立ちをしていた。

ロリコン、とでも言うのだろうか。最近の中学生辺りの見るアニメに出てきそうな顔。

眼球が異常に大きく、キラキラと（テラテラと？）生物的に輝いている。

そして何処の床屋にやられたのか、髪の毛を銀色に染められていた。しかも少女の外見に関わらず無駄に露出度の高い服を着用している。「あれ、人の外見ってこんなじゃなかったけ？」

クリクリとした爬虫類的な上目遣いに、俺はウーパールーパーを思い出した。

確かに二次元だと萌えだろうが三次元に出てきてしまっただけの人外でしかない。

と、いうむねの事を皮肉をまじえて包み隠さず彼女に伝えてみる俺。隠し事はできない性分なので。

「うーん、まだ混乱してるみたいだね。でも、まあ飛んで見れば何とかなるよ。」

神様のお墨付きをもらったのだが微塵も安心出来ないのはまあ当然だろう。

とりあえず、俺がさっきまでの世界に帰るという選択肢を要求する。

「御託はいいからさっさと元の世界に帰せつつってんだよ！」

気がついたら、叫んでいた。

そして、その声が自分の耳に届いて。

初めて帰りがかったんだと気づいた。

多分、これがここに來て初めての本音。

正直な話、自分が元の世界にこれほど愛着を抱いているとは思えなかった。

日常がこれほど尊い物だとは思えもなかった。

こんなくだらないやり取りで自分の運命が決められるなど我慢できなかった。

だが、

「は？それだと私がつまんないじゃん」

創造物と創造主の上下関係を見せつけられ、体感気温が急降下する。多分これが、この神様気取りの初めての本音。

今までの笑顔が嘘のように無表情で放たれた死刑宣告のあと、俺の視覚は強制的にシャットアウト。

次の瞬間何の前触れも無しに俺は地面に叩きつけられた。

瞬間移動とはこの事をいうのだろう。

行間すら開かないあつという間の出来事に、驚くこともためらうことも許されずに。

とりあえず地面方向に足をつきだして、俺はようやく天地を取り戻す。

首を回してまだ頭がついている事を確認し、ついでに辺りの様子を把握すると、

「……………森？」

そこには現実感など欠片もない奇妙な光景が広がっていた。

確かにそこかしこに群生しているのは樹木で間違いないだろう。

しかし、それらの色はといえば一様に、赤。

もみじのような自然的な色ならまだいいが、広がっているのはパステルカラーのような人工的な色の塊。

一日もここにいたら気が狂いそうだ。

「……………フウ~~~~」

苛立ちや、不満や、絶望や、その他凝り固まった自分でも手に負えない感情を空気の塊にして吐き出した。

整頓できない散らばった心に、新しい空気を入れようとして。ようやく、気づいた。

「……………ア……………イギア……………ウウ……………」

この世界には、吸うべき酸素は存在しない。
吸い込んでも、吸い込んでも、圧迫感が増えていくばかりで。
首にたまった異物感を取り除こうと、爪を立てる。
それが、俺の最期の記憶となった。

あれ？ニンゲンって空気がないと生きられないんだっけ？
困ったなあ、さっきのニンゲンも可哀想に。

あんまりうるさいから、適当に世界を選んでじゃったじゃん。
えーと、最低限ニンゲンとかいうこいつらが生きられる環境は……

げ、なんだ、空気に温度に重力に物理法則に時間制限までついてる
じゃない。

あいつらの感情にも気を使わなきゃいけないし。
なんて脆く作ったんだろ、私。
なんでこんなの作ったんだろ、私。

……ま、いいか。
他にもニンゲンはたくさんいるんだから。
ダーツで、くじで、すぐろくで。
次の勇者を選んでみようか。

次のおもちやを選んでみようか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1648/>

異世界召喚の一例

2010年10月14日02時56分発行